つちうら発

未来への伝承

台形土器（左・宮前遺跡出土。右・六十原Ａ遺跡出土）

71

台形土器

縄文土器と聞いて、皆さんはどのような形を思い浮かべるでしょうか。多くの方は口が開いた筒状で、底のある容器としての形を思い起こすのではないでしょうか。しかしながら、約1万年もの長きにわたり続いた縄文時代の中では、時期や地域によって、非常に変わった形の土器が作られたこともあります。今回はそのような土器の一つである台形土器を取り上げます。

写真は、右が市内の桜ケ丘町にある六十原Ａ遺跡出土のもので、左が摩利山新田の宮前遺跡で出土したものです。六十原Ａ遺跡出土例は、裾広がりの短い脚部の上に円盤を載せた形です。脚部に2個1対の穴が前後2か所に開いています。土器の大きさは、円盤の直径が19㎝で、高さは6㎝です。宮前遺跡出土例は、浅い容器を逆さにしたような形で、脚部に5か所の穴が開いています。土器の大きさは、円い上面の直径が17㎝で、高さは5㎝です。両方とも共通して、外面よりも内側が粗い作りで、上面の円い部分などに擦れた痕が見られます。

台形土器とは、縄文時代の中でも今からおよそ5000年前の、中期とよばれる時期にのみ用いられた土器です。文字通り物を載せる台のような形で、装飾性が乏しく、安定感のある脚部を持ちます。上面は平坦な円形で、脚部には一定間隔で穴が開きます。しばしば、この土器の上面などには、使用時に付いたと考えられる擦れた痕が残ります。このような台形土器の使い方としては、儀礼用の土器を載せる器台説や、土器製作用の回転台説が考えられていますが、定まっていないのが実情です。いずれにしても、この台形土器は、一般的な土器のような食べ物を煮たり、貯蔵したりする容器としての用途は考えられません。

また、台形土器の盛衰をひも解いていくと興味深いことが分かります。もともとこの土器は、関東地方西部から中部高地で数多く出土します。初期のものはこの地域でのみ見つかり、その後東日本全体に広まることから、この土器の故郷は先の地域であることが分かります。加えて、台形土器が広がりを見せる頃、この関東地方西部から中部高地が起源となる特徴的な縄文土器の文様などが、遠く離れた関東地方東部の土浦出土の土器にも多く見られるようになります。このことは、台形土器を含めさまざまな文物や情報が地域を越えて動いていることを暗示しています。

台形土器を通して、多様な土器を用いた縄文社会の一端や、地域を越えて交流する縄文人の動きが理解できます。

今回ご紹介した資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場内の考古資料館に11月末まで展示していますので、ぜひご覧ください。

問 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎826・7111）

発行　土浦市　〒300-8686　土浦市下高津一丁目20番35号　☎029-826-1111
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/　E-mail:info@city.tsuchiura.lg.jp
編集　市長公室広報広聴課　再生紙を使用しています　PRINTED WITH SOY INK 環境に優しい大豆インキを使用しています
次回「広報つちうら」11月中旬号は、11月18日(火)発行予定です

人口と世帯数（平成20年10月1日現在）　14万3700人（男7万1515人　女7万2185人）5万5543世帯